

東日本大震災以降も多くの自治体で、高齢者の生活拠点となる介護施設の安全な場所への移転が進んでいない。高齢者人口は二〇四二年をピークに増え続け、介護を必要とする人も増大する。甚大な災害が頻発する中、自力で避難できない災害弱者の命を守るにはどうすればいいのだろうか。

災害弱者



東日本大震災の津波で全壊し、がれきが散乱する特別養護老人ホーム「赤井江マリンホーム」の1階内部。2011年4月、宮城県岩沼市で（同老人ホーム提供）

宮城 津波時の判断 教訓に

「津波の高さ予想が大げから一〇倍以上に引き上げられ、逃げるしかないとなった」。宮城県岩沼市の特別養護老人ホーム（特養）「赤井江マリンホーム」の園長小助川進さん（こは）は、職員から聞いた東日本大震災発生直後の様子をこう話す。自身は当時、会議で仙台市内に、平屋建ての施設は大津波にのまれ全壊したが、職員とのつぎの判断で高齢者と職員計百四十四人は全員無事だった。

海岸までわずか約二百メートル、経験したことがない激しい揺れの後、職員は玄関前に車を横付けしカーラジオで大津波警報を聞いた。周りに高い建物はほほほ。しかも予想は一〇倍以上。直感的に仙台空港への避難を決断した。

職員の頭には、約一年前に南米子リであった大地震に伴う出来事がよみがえっていた。宮城県岩沼市にも大津波警報が出され、施設のマニュアルに従い、五〜十秒程度離れた二つの系列事業所に全員避難した。かかった時間は一時間以上。一方で地域住民は、施設から一・五、先の仙台空港に避難していた。

空槽はマニュアルとは異なるが、利用者九十六人の中には認知

徳島 東北の惨状見て施設移転

症の人も多く、避難にかかる時間を優先した。介護用の送迎車は車いすのままでは二、三人しか乗れない。毛布やシーツを敷いて横に寝かせ、一回でより多くの人を乗せ、三往復で避難を完了させた。

「マニュアル通りに避難していたらアウトだったであろう」と小助川さん。途中で津波にのみ込まれていた恐れもある。

その後、岩沼市内の内務部に移転し、二〇一四年二月に業務を再開した。災害時には避難行動などソフト面の対策も重要だと考え、他の職員と当時の判断や心算をつづつた「奇跡の脱出」を作成。教訓を後世に伝えようとしている。

被災地とは遠い地でも、震災直後に移転を決めた施設がある。徳島県美波町の特養「ねんりん」だ。「津波被害を免れた」とシヨックを受けた」と施設長西田健人さん（にし）は話す。

当時の施設は海から約八百メートル、玄関部分は海抜一〇メートルも高くなかった。南海トラフ巨大地震による津波では三層建て施設の二階天井付近まで浸水する想定。要介護3以上の症状の重い人が入り、迅速に避難させるには人手でも難しかった。

しかし、用地の取得は難航。約二年かけて何とか海抜約二〇メートルの山林の一角を取得し、一六年十二月にようやく完成した。総額約十四億円に対し、徳島県と美波町からの補助は計一千万円だけ。負担は経営に重くのしかかった。

自力避難困難 迫られる対策



高台に移転した特別養護老人ホーム「ねんりん」。徳島県美波町で（同老人ホーム提供）

それでも西田さんは決断は正しかったと話す。「地震や津波は介護職員が手薄になる深夜や早朝に起きる恐れもある。移転後、入所者も職員も安心して眠れるようになった」。そして、職員からの言葉が忘れられない。「費用はかかったが、これだけの命が助かるんですね」

